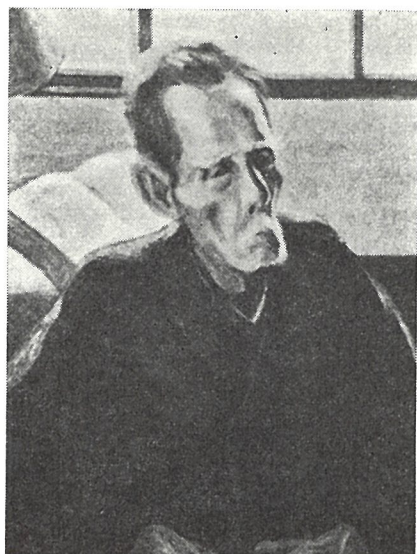




同志社人物史（８）

浮田和民

高 道 基

をうけた。昭和十六年八十二才の高齢で早稲田大学を退き以後の六年間臨終に至るまでの最後の生命を傾けて書かれたA5判百八十頁にわたる著述は、史家浮田の面目を躍如としてつたえている。（同志社大学人文科学研究所第二研究所蔵）

浮田和民は安政六年熊本城下の竹部久本寺東横町（現在の熊本市七軒町）に生まれた。浮田家の由緒は慶長五年関ヶ原の役における西軍大将、宇喜多秀家にさかのぼることができる。浮田が後年、「六合雜誌」その他に活躍するときにしばしば用いた「豊臣」のペンネームの由来であろう。

明治四年、十三才の時、創設間もない県立熊本洋学校に第一期生として入学、小崎弘道、山崎為徳、横井時雄らと運命的な邂逅をもつこととなった。浮田はここでキャプテン・ジエーンズの訓陶をうけ、同輩の秀才たちと共に西教（キリスト教）に接することとなる。一体何がこの武門の裔を動かしたのだろうか。浮田は後年次のように述懐している。

「余が始めて基督教を聞きし頃、最も感動したことは、『爾ら心を尽くし精神を尽く

「病人のような蒼黒い顔をして、万巻を読破した窪い目は、常に内の方ばかり見ているような小男の沈田さん」

と徳富蘆花はその自伝小説ともいべき「黒い目と茶色の目」の中で若きころの浮田和民博士（法学）について描写している。浮田の旺盛な読書欲については伝説とさえなっているけれども、その風采は現存の写真で見ると新島先生とならんで数頭低い。温和な学究と見うけられ、また事実、その生涯の大半を早稲田大学の学風形成にささげた。しかし彼の

「窪い目」は、決して蘆花のいうように「内」にばかり向けられていたのではない。むしろ逆に彼の鋭い史眼は明治、大正、昭和と変転してゆく時代の流れにひたと据えられていた。そのことはある時には敢然と時流に抗したはげしい警世の論陣ともなった。私はそこに浮田の真の面目を見るように思う。旧年、早稲田大学より定金右源二博士が御来校になり、その際一緒に浮田家旧邸跡や墓所など調査させていただいたが、その折、遺稿出版である浮田和民著「世界大戦全局観」の御惠贈

し意を尽くして主なる爾の神を愛すべし。

これ第一にして大なる誠めなり。第二も亦これに同じ、己れの如く爾の隣を愛すべし』てふ基督の教訓であつた。」(大正四年博文館発行「文明の世」)

愛神と愛人。これが浮田の生涯をつらぬいた指標となつた。

明治九年、一月三十日、三十五名の洋学校生徒と共に熊本市西郊の花岡山に上り、「奉教趣意書」に署名、西教を此の国に布かんとを結盟する。この一挙が日本プロテスタント史に特筆される「熊本バンド」の成立である。(この挙については本誌の第二号に辻橋三郎氏が書いておられる。)

同年九月、海老名弾正、金森通倫らと相携えて上洛、新島の門下に投じた。当時の同志社は浮田らの目にどううつったか。後年山室軍平に彼が語っている如く、(恰も留岡幸助君の家庭学校同様)(同志社六十年史)のありさまであり、整然とした洋学校で教育をうけ、ジェーンズのピュリタンの風格に培かれてきた熊本青年は、いたるところに憤懣の種を見出さざるを得なかつた。新島、デビスによって指導されるバイブル・クラスも彼ら

の目には幼稚低級なものとうつった。彼らが行くところではいつも騷擾の風がまきおこつた。しかしともあれ彼らを卒業に導いたものは、新島の変ならぬ識見と、碩学ラーネッド教授との学問的接触であらう。ラーネッド教授は同志社の長く記念すべき人物であり、殊にその経済学は日本の経済学史に不滅の業績をのこすものときこえている。この人については熊本青年の誰もが何とも言えなかつた。その講義案は彼らのうち、宮川経輝、横井時雄によつてそれぞれ邦訳されたが、その最も完成された講義案を、浮田は明治二十二年、ラーネッドの依頼によつて完訳、「経済学之原理」と題して東京の経済雑誌社より発行、第一高等学校はこれを教科書として採用するなど、江湖に迎えられる。

浮田の在学は三年にわたり、神学、哲学及び関連科目を履修、勉学のかたわら草履はきで同級の士と共に大阪、神戸、岐阜などに伝道にでかけている。この伝道の情熱は彼を駆つて卒業後大阪の天満教会に赴任させ、ここで彼は心理学を講じたりなどしている。当時の教会の日本の社会にもつていた啓蒙的役割をよく物語るところであらう。けれども教会

牧師としての職は彼には適職とはいへなかつたのか。日ならずして上京、明治十六年盟友小崎弘道の興した警醒社に拠つて、植村正久と共に「六合雑誌」及び週刊雑誌としての「東京毎週新報」の編集にあたることとなる。彼の後年の盛んな文筆活動の素地はこの時に養われたものといえるであらう。下村孝太郎の妹末子との結婚もこのころである。

明治十九年、浮田は「東京毎週新報」の後身である「基督教新聞」の編集を松村介石に譲り母校同志社に帰任、西洋史、文明史を講ずるかたわら政治学を担当した。しかし文筆活動もようやく呵成を加え、後輩徳富蘇峰の「国民之友」前記「六合雑誌」に健筆をふるうこととなる。就中「国民の友」に掲載された「英雄崇拜論」「日本道德論」(明治二十五年)の如きは当時多くの青年を感奮させ愛唱された名文と伝えられている。その文章は蘇峰をしてさえ「浮田氏の文、風調絶佳。朗朗として諷誦すべし。」と嘆ぜしめている。しかし何より注目しなければならぬのは、当時すでに明治二十三年の憲法発布によつて一応天皇制絶対主義が完成され、次いで明治二十三年の教育勅語によつて忠孝を主軸とす

る国民道德の体系化が行なわれている時にあった。

「仁義を政府の力によりて行なわんとするは木によりて魚を求むるの類にあらざる乎。夫れ政府と人民との關係は權利と義務の關係なり。制度によりて仁義は行なはるべきに非ず。」

と論じ、新日本の道德はただ「真理のために真理を追求する」學術的道德、政府は政府のためならずして人民のための政府であるとして「最大多数の最大幸福」を目的とする産業的道德、第三に言論と真正の与論の擁護に力を致すべき憲法的道德を挙げ、これらの破棄される時「日本なきに等しきなり。」と結んだ日本道德論の立論であらう。

明治二十五年より二十九年にわたつて米國エール大学に留学、ラッド博士の下で史學、政治學、政治史の研鑽にはげむ。しかしこの留学中「六合雜誌」百六十四号に投じた「外國宣教師論」の一文が同志社とアメリカン・ボードとの間の物議をかもすこととなった。その論の骨子は、外國宣教師の偏狭固陋と、日本を宗派の植民地と化し、その結果却つて従前よりも一層國民の精神を狹隘偏屈なものに

しようとしていることへの苛惜なき批判であった。そしてこの一文のために彼は同志社を去る因を自らつくつたといえる。明治二十九年エールから帰朝した彼は、時の同志社総長小崎弘道の宣教師との衝突、退任に連決して政治学校教頭としての地位を退任、上京する。浮田和民再度の上京を迎えたものは早稲田大学（東京専門学校）であつた。すでにここには浮田の後輩として俊秀をうたわれた大西祝があり、その紹介で坪内逍遙に会つたのが端緒となつたとつたえられている。ちなみに熊本バンドでは家永（辻）豊吉がすでにここに在職し、岸本能武太、安倍磯雄は浮田の紹介で早稲田に奉職することとなっている。それぞれ異色ある活躍をとげる人々であつたことを思い合わせると、同志社は惜しい人物を失つたものだ。

浮田の早稲田大学（明治三十一年東京専門学校より昇格）における講義科目は主として西洋史、政治學であるが、その広い學識は大學設置に際して非常に重宝されたことが、岡島鴻吉氏の「大學創設のころの中に見える。

明治三十三年三月より同四十二年七月まで早稲田高等師範部長として教務を掌理、恰か

も間に日露戦争をはきみ、増大してゆく國權主義の汐流の中で私學形成につくす努力はなみ大抵のものでなかつたことと思われる。

明治四十年四月より早稲田大学社員、維持員として大學経営に従事、明治四十一年三月九日五十才で法学博士の學位をうけ、かたわら明治四十二年二月より、当時最大の綜合雜誌「大陽」の主幹となつて社會教育に従事することとなつた。

「余新たに本紙に主幹たりと雖も、その主義方針は別に従前と異ならざるのみならず益々内には人格の觀念、自由の理想を發揮して倫理道德の大平、立憲制度の基礎を確立し、外には世界的精神を鼓舞して平和の競争に万国と駢馳し、文明の事業に世界と同化、人類の幸福を増進せんことを主張すべし」

右は雜誌「太陽」主幹就任に際して掲載された浮田和民の挨拶文である。彼の思想の基本的特質はここにつくされていると思う。事實明治より大正にかけて執筆掲載された論文のほとんどは右のような特質に集約されるだらう。けれども日露戦争とその後につづく明治

政府の歩みはこうした浮田の願いに沿うものではなかった。この時期における彼をめぐる一二の事件をあげて見よう。その一つは日露戦争勃発時において世間を賑わせた「俘虜擁護論」である。その端緒は明治三十七年六月、対島沖における常陸丸の遭難であり、常陸丸乗組の軍人が、露国の軍艦に捕われて俘虜となる恥を免れるために船上で自決して果てたのを、当時の新聞雑誌が大々的に掲載、日本武士道の華として賞揚したのに対し、浮田は八月丁酉倫理会講演集に「生存主義の道德」という一文をかかげてこれを批判、義務をつくさぬ「討死主義」の道德を論難し、更に「人間の生命は仁義よりも価値あり」と展開、ひいて人格主義におよぶ論文であるが、右のような一文が当時の世間でどのように迎えられたか想像に難くない。浮田はこのため、軍人はもちろん、世間一般より非愛国者のそしりをうけるに至りながら、敢然とその所説をまげなかった。そのことを大山郁夫は次のように回想している。

「先生が自ら真理と信ずる主張を発表するに如何に勇敢であられたかは、日露戦争当時の常陸丸俘虜問題についてその面目を見

ることができる。当時先生は全く四面楚歌の状態にありながら、軍閥を恐れず、真理のためには一歩も退かない態度であった。ここに先生の真骨頂があったと思う。」（浮田和民先生追懷録）

次いで浮田の面目をつたえるものは、明治四十三年「大逆事件」に際しての彼の桂内閣攻撃であろう。日露戦争中の反戦運動を足場としてもり上りつつあった社会主義運動を一挙に弾圧し去ろうとする政府の暴挙が、幸徳らの大審院の一審における断罪となるや、彼は直ちに「太陽」に筆をとり、桂内閣の措置を弾駁、痛憤を向けている。去ち「社会主義および無政府主義に対する憲政上の疑義」がこれであり、この一文は浮田がその所信から、社会主義に対する政府、国民の無知と立憲的国民としての基本的素養の欠如が、かつてキリスト教に対していただいた当局の恐怖同様、極端なる弾圧政策を遂行せしめ、遂には、風を蒔いて暴風を刈る「愚策となることを指摘、社会主義者に憲政上の自由をあたえよと迫り、このことなくして立憲国は有名無実と攻撃は痛烈を極めている。不幸にして時代はこの叫びに耳をかさなかった。ひとり大杉栄の

みこれに長文の賛をよせたにすぎなかった。時代は浮田の悲願とは逆の方向に傾きはじめていたのである――。

私はこの稿をかきながら、浮田のような人こそ同志社が日本の社会に送り出した代表的パターンの一つではないだろうかと考えた。彼の思想には殆ど変貌変節のあとがみられない。これは彼ほどの拔群の読書家にとつては殆ど奇異の感じさえうける。彼の新しいものを求める学問的苦斗の底には、いつも「愛神愛人」を基軸とする同志社の人格主義教育が流れていたようである。冷徹な学者であったが、真理のための戦いをいとわなかった。彼の目にはいつも真に民主化された日本の姿がうつっていたことだろう。昭和七年「日米愚戦」をかき、「日米非戦」となえながら、皮肉にも日米開戦の年（昭和十六年）、早稲田を退き、敗戦の風の巷にふきとおる昭和二十一年秋、東京豊島の自邸で死去。熊本洋学校以来の知友小崎弘道の一子道男牧師の手によって葬儀がいとなまれた。

（神学部講師・宗教学）